

繊維廃棄物で ボートを製作

あす左京で発表、進水式

日本繊維機械学会



繊維廃棄物から誕生した擬木製のボート
(兵庫県尼崎市)

日本繊維機械学会・繊維リサイクル技術研究会がこのほど、繊維廃棄物からボートを製作した。事務局の京都工芸繊維大と滋賀、京都の企業が共同開発した擬木製で、十四日に京都市左京区の国立京都国際会館で発表会を行うとともに隣接の宝ヶ池で進水式を行う。再利用が難しい繊維廃棄物のリサイクル方法を研究するため、日本財団の助成を受けて初めて取

り組んだ。開発したのは、同研究会委員長を務める京都工芸繊維大の木村照夫教授をはじめ、京都市の制服メーカーや大津市の紙管メーカーの担当者ら約十五人で、工織大や兵庫県尼崎市の県立武庫工業高の学生らも参加した。完成したボートは、長さ約四メートルの繊維廃材製の擬木板を約三十枚つなぎ合わせた最大十人乗りの擬木船。擬木板は、衣類などの廃棄物をかいて繊維に戻したうえで、樹脂を混ぜて固めた。くぎ打ちなどの加工ができるように杉材に近い性質に仕上げた、という。木村教授は「木材とほぼ同じ物性で、浸水もほぼない。繊維廃棄物の活用法を探るきっかけにしたい」と話している。記念講演会は午後一時から同三時まで。進水式は午後三時半から。無料。問い合わせは木村教授の研究室 ☎075(724)7863まで。

こげよりサイクル〜♣ Tシャツ700枚分「進水」

Tシャツにして700枚分の古着をリサイクルして作った船(全長3.6m)が完成し、14日、京都市左京区の宝ヶ池で「進水式」があった。

日本繊維機械学会(大阪市)が繊維廃棄物の活用を考えようと企画。京都工芸繊維大の木村照夫教授と学生らが製作した。古着をほぐして綿状にしてポリプロピレン繊維を加え、木材と同等の強度がある強い新素材を開発した。加工も自由でできるといふ。

木村教授によると、年間200万枚以上に

のぼる繊維廃棄物のうち、リサイクルされているのは10%程度。同教授は「新素材は将来、住宅建材や梱包(こんぼう)材への応用も可能。環境保護につながる」と期待していた。

乗り心地を楽しむ関係者ら＝14日、京都市左京区の宝ヶ池で

